

歌合部類

八月十五夜
九月十三夜

九

皇
911.18
Se
0



撰歌合 建仁元年八月十五夜和哥所



題

月多秋友 月新松風 月下拈衣

海色秋月 湖上月明 古寺殘月

深山曉月 望月露深 田家見月

河月似冰

作者

左

女房 後鳥羽院

左大臣正二位藤原良經 後京極坊政



沙弥叔阿

俊成口女

宮内口

越前

丹後

散位正四位下片友原朝臣五家

沙弥寂蓮

從五位下行右了助片源朝臣家長

散位坂五位下片縣主鴨長明

正五位上行左兵衛尉片友原朝臣秀能

右

内大臣正二位兼行右近衛大将皇太子傅片源朝臣通親

前控傍正五位

正二位行控大納言片友原朝臣忠宣

兼正三位行左近衛中納言兼右近衛少将片友原朝臣

小侍從

澄波

散位正四位下片友原朝臣隆信

正四位下行左近衛中納言片源朝臣通具

正五位下行左近衛控少将兼左近衛中納言片友原朝臣定家

五位正四位下位藤原朝臣保季
從五位上守左色未位少将藤原朝臣雅經
從五位下守左色未位少将藤原朝臣具親
從五位上行集人正位大江朝臣公宗

讀師 右方

講師 左方

判者 釋阿

一番 月多妹友

讀後拾

左孫

右大臣

月あつて雅はあつてむ君代は秋乃こころのつくらるも

右

儲成

こころいふり子代の秋を秋とて人ほきて秋月あんの秋は事ふ

右大臣の秋は事ふ

二番

左孫

沙路寂蓮

新古

多秋乃招とむうふあつてあつて秋の秋は月

右

お控傍正

君の代のをふかれぬ秋は月あつて秋の秋は事ふ

右大臣の秋は事ふ

三番

左指

女房

けしき乃ちとせの秋はしく免らるゝあれてもねむの月さるは

右

雅徑

いく秋を空よ整つてて君う代よことまんこり乃をぬれ月

左子年の秋いく免らりの月言振神妙く思

こ希古今こる仍考務

四番

左

乃家

君う代の整つて思へはひささ乃月のま古のりよを忘れ秋

右指

肉大に

ゆくを忘れ移ひささこの秋乃月何ういれをたのめあ

左お右方殊を了上旨右哥右方指ひささ乃

月を以て空しうへは未の句とこ一急のこあよ

五番

左指

宮内口

り未もいくよの秋乃友あねやをれてもあふ山の月

右

公経

よきておぬいふいにくらりつめ秋の月をえんん

判云右哥友の心をこくお母つるくやしく以左

右指

六番 月お松風

左指

女房

庭に松木のつらりと家月影よみつくのあき風そよ

右 月多秋友 控大御所

そよわくそよわく 月よ多秋友とさしそよ乃山のあ代乃秋

右 乃下向け乃侍一哥なりと左方より判者以

左 乃侍

七番 月あき風

左 抄 左大臣

妹の衣乃ひらりもそよもひらりも月乃うらら松風そよ

右 月多秋友 隆信朝臣

そよあして誰かきくむ秋の月とまふそよむ(さ家代乃松

左 乃侍 姿をうく右に祝の心ありとくお侍

八番 月あき風

左 侍

新後

月影を忘さつ乃浦の松風よむそよ水そよら流る

右 内大臣

あけやこの月をみとり乃春うえは秋あ風のあよもむ

判者以右乃侍但左の哥こくに宣旨也一侍の中

左 乃侍 宣旨

九番

左 侍 文内

月とあはれそよんたりよお好まこの松とあそよむ(むら松風

右 通具

あきうあき洞といふ時あらん月あさきたるよの松風

右 月よこそあきう乃春風そよられとむ松

左 侍 松風そよら

左 後

後成口女

月よふあこねをつづねの衣乃ち後のこころを吹風

右

具歌

くるとつたなく山のそまをてしそらあ月よりあ乃ち子の松風
右はあ月よりああのかげあろあまうこやあう上よ左
心あそああのかうあうこふらううくねれそこあ後
くは判者やう

十一番

左 後

寂蓮

月か程もああめつちも任吉の松とけいしてあさうせそ吹

右

保季

はろく空流り松あうほりさて月まうまううさ乃浦風
くこのうう風任うう乃松よ及うううそあたあ後

十二番

左 後

鴨長明

^{新古}あそれいちふ物あ月よ又さう身ひらう乃そあのま風

右

小待信

すえう一の月かさう乃浦あみお松あ風と神さひよそり
ああ風乃神さひよろくんさうそにううあうそ作
うへよああ身ひらう此あ子のあ風免つううとく
以左乃後

十三番 月下接衣

左 後

宮内口

まろあきてるあふこそそ乃をさこかれ麻のさ衣月ようつ夢

右 月あ松風

新槍傍正

秋八月月まもああハ松の風いふあうあていうああれそん

右の松の風も優ふは侍れとあるふとそそのすさひ
るしとけけあさこのさ衣月ふうつあまにけいそ
やゆとて以たあ侍

十四番 月下掛衣

左侍

女房

あさち乃月吹風よ秋さきてぬきと人ハ衣うつあり

右

定家

婦風よ夜さきの衣うちまひぬききゆく月乃をさ北山本

右侍あふいくまふ上よたのあしにけいけい

右侍

十五番

左侍

右大侍

新古

里あれく月やあぬと恨てと誰あさちあよ衣うつらん

右

通具

さうあきてさうていさきとあしを月影よ衣うつらん

左侍あしにけいけい

十六番 海をさ秋月

左侍

後成は女

浪のよさ里乃あおやと澄て月影かふら秋のけいけい

右月下掛衣

澄波

すうやあらんのこと乃秋のさ八月おさあて衣うつ也

又以たあ侍

十七番 海をさ秋月

左侍

誠あ

新續古

紀の玉や秋さあそとあさう風あさこの月乃をさめらけ

右月下掛衣

公景

かすにみん人のあやとやてし月ふ衣うつしむあつるあは里
吹上る月をそへてなうにわたりくさあそて又た

十八番 海をこ秋月

左後

宮内口

^{新古}あゝろあゝをしそ乃延書のためとれ月やれとみほわ物

右 月下掛衣

内大臣

そゆへようむふつちのきりくいつる里の月とるそん
月やれとみほわ物く限なくおしそてわ後

十九番 海をこ秋月

左後

秋阿

そとへてもいそんはほし明るる秋のこあつ此流の上乃月

右

小侍

^{新勅}

おきつ風吹ぬの浦よう流乃うらともみそ秋の長れ月

たろくを結し中あ者了之

二十番

左後

丹後

^{新古}あはれかなあそ乃秋のふハのふしと浦よをむ月ハるを

右

雅徑

秋ハるふ浦ハありの流のよまう月とハいつりあうや

ゆえの流く月をそらり石を記まハあし後と異

浦よりこむあつしそて後と定す

廿一番

左後

鴨吉明

^{新古}松一まや志不らむあまの秋乃神月ハ物さふあうひのこらハ

右

澄波

松竹やどしころ延喜をいあし八月よやこころい神めくころん
左番 跡小うろい仍左番

カニ番

左

あふ秀能

あふ乃やくとふの相家くころいしとくはかろるる月

右番

内大臣

延喜人七月よのあれいそ名ころい秋を招くころいは
左月のおお落たりそころいして秋乃さほとらに右
の侍くゆり之

サニ番 湖上月の

左番

丹後

^{新古}おもむく浦く海に流るる月を跡めく志賀のくり強
右

内大臣

うもむくころい乃山風海を八月もてころい浦のころい流
海を巻はまき古侍あころい海は流れと免つころいさあ
あふれを控以左番

カニ番

左番

女房

かころい延喜の湖乃水のおとふころい月あふん秋をせそ吹
右

澄波

あふころいやまこころいてぬ志賀の浦乃流と空とふまゆり月記
乃乃湖のあのおもむくころい月あみよころいあふ
この外とく以左番

サニ番

左

新阿

よ白ころいや月乃水は志賀浦に控くころいこの扱はつしきり

右指

お控傍正

あつれ浦よこさそや月乃やうらん星うぬ祚の法とびて
たの事家事控巖うとく祚威依く為務

サ六番 古寺跡月

左指

歌阿

玉葉

又まらひ嵐乃やうのふととら松の庵下りる月乃月

右 湖上月明

歌あ

新續古

かゝるや秋のこらひとありむきハてり月あふ浦風を吹

右のてり月あふあ乃たの事ふハ今下におとりて空
ゆとしてあ指

サ七番 古寺跡月

左指

秀能

まつせ山あうらさるそと出つ月やうく木れるハ月乃空

右 湖上月明

家長

月清こ流のこそあう流そもゆく急あくま記志聖の浦風
左あ又宣仍く為務

サ八番

左指 古寺跡月

文内口

秋こる波おがつうあやまつせ山あふこれもふ跡る夜の月

右

乙経

秋さめとふ流のまそあか記志をまつせやまのあつれ乃月
左あれこれもと跡あつれ行り右又あつれ

たつろあつれハ准てこ指

サ九番

左指

鴨長明

まつせやう流のひくさふおろる老ハとこけり月の入るれ空

右

具歌

あれやけ跡ふらん乃歌あしむき登のやうにみぬ乃月
左身後のひびり入るのを控ふらんハ跡月の心
いづれもや陳尸云遊子程跡月行るを
多々曉月也曉跡月さうくくハぬまや控ふれ
さうり直とくハ御中判者ヤク

二十番 深山曉月

左

女房

新續言

位あれく誰歌やうなるむじん吉登乃おくのまぬの月

右身

お控係正

く一登山月ハきよのよかききて嵐よのころお籠乃一歌
左深山乃んぬあひやう中月ハ家とこあれて
らんやまきくハく侍もと寤ア

廿一番

左身

左女房

新百

涼々ぬお山乃店の移さあこふこそるまのつら月ハ寝さ

右

雅徑

人いあて程のまきの月とこ家深山乃秋のあつらぬ乃以
左右とくハ事ありハ仍お控

三十二番

左身

之内口

侍えても明やうぬ夜乃月ハ控みちきとくハ深山乃の陰
右 控大納言

く一登やうとく吹らう秋風ハ誰志のくとしてき明乃月
右 侍たとくハ吹らうハ其ハ優もあはれハ
三十二番

左方

後成口女

秋乃夜のふつとをさきとめりり吉登の月乃明このを

右

内方臣

あつれありもせむせぬ山あれをわさしむる秋のふれ月
又しむる事ありしむるわち中定也

三十四番

左方

内方臣

^{續後拾}よとのそ行しえあれとみうし登の松よみつれを明乃月

右 野月露涼

内方臣

あらあふあふあをさうつるあふるあふる月夜も秋はあふ

右 芳幽玄の事よみ思ひうりて侍れとたうりく

うりしむるありしむるありしむる

五番 深山曉月

新古

左方

鴨也の

うもまうし独りあふり松の葉よあふるもあふるも明乃月

右 登月露涼

内方臣

おさあふるあふるのうらわ乃神の露とのすえと月のさか

たあふひとりあふるの松の葉よあふるもあふるも

うらわしむるありしむる

三十六番

左方

女房

月まあるを露と露とあふるあふる乃小露りもあふるあふる乃

右

貝靴

これとあふらうりあふるあふる秋風の葉もあふるあふる乃

右 登りあふるあふる乃あふるあふる乃あふるあふる乃あふる

あふるあふる乃あふるあふる乃あふるあふる乃あふるあふる乃

にりくくはゆとて以左は指

三十七番

左指

左大臣

^{玉葉}秋の聲乃志はるを秋とくよその唐公すうるは月とぬかかある

右

お権信正

あはれ月とむせく乃志くを秋よまこ一をある秋に秋もく秋
志はるを秋とくあろくくはゆとて又以左は指

三十八番

左持

俊成口女

あはれちかやとる月とぬかかあるを秋とくあろくくはゆとて又以左は指

右

雅信

神の上よ又け月とぬかかあるを秋とくあろくくはゆとて又以左は指
志はるを秋とくあろくくはゆとて又以左は指

三十九番

左指

越前

あはれくさむらねを人の白あまふくれを春の秋の夜は月

右

保季

月やとる春は春を乃くり秋をさあけぬを秋は野へ乃秋風
あはれあまふくれを春の秋の夜は月

四十番

左指

秀徳

新編古

あはれあまふくれを春の秋の夜は月

右 田家え月

隆信

い田く風のあはれをそとくくはゆとて又以左は指
あはれあまふくれを春の秋の夜は月

四十一番

新編古

左指

女房

右ちりこ山田りる床のいる庭をれあきあれて月とらるん

右

通具

床のひあれよりこふ小田りる床を寝とらあう月もれを
やま田りる床のうまひよりあく物もあかかき
やま田りる又為指

四十二番

左

秀袿

新編拾

右田りる床の秋風吹そりてりねさひき山のへ乃月

右指

定家

さきりしれ妻とふ小田よあきをりて月影をりさうのく女指
右指本古風とさう山のへ乃月もほらりて定家

四十三番

左指

左女房

秋のをきくといみれといあひりる休えの黒六月のまをむ

右

具親

いひきともいひきさうわねねえかいるを乃風もあさの月影
左女房秋涼を秋あきつは治世の月の姿詞をいとおき
とく指と定家

四十四番

左指

後成口女

新古

いるをあつ風はほをて住居八月をまてにもつり

右

お権信正

同

かりのさか休え乃小田よあきをりて福ね東の床も月をさる

左又優もや仍女指

四十五番 河月似水

左孫

左大臣

新拾

あねも又神代はさるるまのこ河月のこ母り子あらく親とハ

右 田家元月

内大臣

いさむしあかり田乃彦ふ月をわい志をさあへんさ神代は月ハ

月のあはあらくあかひかりくゆあの上よいさむしあ
つり田しつゝをきささいしとく以左孫

四十六番 河月似水

左

新拾

新續古

あきあけ河風さ量こ月こて氷ハ秋乃と此よりきけ

右孫

お権傷心

うの河月を若くゆく氷さけしそあらしりこれ
左乃水ハ秋のとつゝおもへあ新し仍以左孫

四十七番

續後撰

左孫

越前

月影ハこつゝこみそしり雪川志こを流よ秋風そ吹

右

雅經

月々あいつふささゆくうと氷るあふこのあそ乃川風
いつたさしり唐かうさけて空由仍左孫

四十八番

左孫

寂蓮

續新古

月流こつ海をさそあふ山河乃そつさるさ水の白流

右

通具

月のまむ川せの流ハさむしこてあそあれぬ氷あふり
又以左孫

四十九番

左孫

家長

あしをよいさふ流のまつて月影にかき字流乃川凡

右

保季

岩乃よハ流ハさ流ふたつに何月ハさしものあまし孫を

右岩乃よハ流ハさしものあまし孫を

五十番

左孫

後成ハ女

大井河カセさふさふ流のまハさ流して少く月のさき

右

定家

下見ささ月影流さあ母津川むとあ水とこ不ささ

あわささこ不ささあ母津川むとあ水とこ不ささ

女房 孫六頁一

内大臣 孫二枚一頁五

右大臣 孫五枚二

意圖 孫三頁四

秋阿 孫二枚一頁二

控大納言 孫一頁一

後成ハ女 孫三枚三

公經 頁二

宮内口 孫四枚二

小侍 孫一頁一

越前 孫三

源破 頁四

丹後 孫一枚一

隱位 孫一枚一

あま家 孫一頁一

定家 孫一頁三

寂蓮 孫三

通具 頁四

家長 孫一

保季 頁三

歩明 孫四

雅經 孫三頁三

秀能 孫二頁二

具親 頁五

公宗 頁一

水無瀬殿戀十五首歌合 建仁二年九月十二夜

題

春恋

夏恋

秋恋

冬恋

曉恋

暮恋

霧中恋

山家恋

古心恋

旅泊恋

冥路恋

海色恋

河色恋

寄雨恋

寄風恋

作者

左大臣藤原親定 後鳥羽院

右大臣藤原基綱

左大臣良經

右大臣能宣公繼

後成以女

宮内卿

大倉口教原の家
上総今藤原家隆

大色忠控少将藤原定家
大色忠控少将藤原雅経

講師

家隆朝臣

講師

定家朝臣

判者

皇太后宮大夫入道釋阿

当座付御負追加判詞

一番 左衛門

左衛門

右大臣

うらむを乃水ぬる涙をけぬれと程と神はむそ初まつ

右

俊成朝臣

^{新市} 面鏡乃て辰ちる月をやとりるをやむし一の神乃るまよこ

左衛門のうちにまたさあつり学共といへる事
をこらし右袂ハ月やあまねまやむし一のつゝあま
ゆ也ともふえんよハえんて侍と左衛門家神ハむ
それ建つといへる事と殊より後くえん侍を
以左衛門

二番

左衛門

親定

月影のやまひ乃山の雲むねと花うこつを^いはれ^たり^けり^あは^れは^次

右

文内口

さて又慰むやとむあむへらそあるあをも膳をそらんて
右乃高もて又ととさうらそるさかしくも
みし侍とさうとさあひいといふ末乃白や四と
いひあうつてもばこそや侍む右侍生乃や
うこそむとさるといふかそるといひくそ侍り
もこそ侍とさう

三番

左拵

有家御位

あそふふたねあかくと恨もて衣もあそむあおられてそる侍
右

雅徑

人志道深とてむせふひうとふ泪うちいほす神乃有家風
左衣そあそわれくそあうといふ神とせあわるといふ

四番

左拵

定家御位

あれやあそまほふそあをれとそるえかあをかの
右

家隆御位

うらたてもあつらう思ひかうつろあそまは乃侍ふくれ
左はそれとそるみくあかのたいうつ侍あそま
あそれゆふくれとあそまをこころんともふうらうく
はんと侍を侍員けつうひい時の氣儀と侍るん
とあそた乃侍と定れ侍也

五番

左指

お大後心

高もせてあまきしういふるん若乃こそあまおあろ月夜を

右

控中納言

おもしひもや白ひとささく栴のうつりあを此に身ふあゆんと
たあるもほしういふるんとささくを乃控は御月
夜とささくつろをささくいひくおしひくささく
右おもしひもやとささく未ふ何とせんといふささく
き乃事ささく人とささくされ作りしは左をもて
うらと定し作り也

六番 友意

親定

新續古

左 指うさる此にささく乃天のささくささく山おしひ

ささくといふ若乃若乃あやち若阿やちとささくぬ神のたさく水

右

後成心

續拾遺

ささくや若も程る此の夜乃若さあささくのささくささく

若さあささくささくささくささくささくささくささく
あささくささくささくささくささくささくささく
やちとささくささくささくささくささくささくささく
乃若のいささくささくささくささくささくささくささく

七番

左

ささく

身おあささくささくささくささくささくささくささくささく

右指

ささく

ささくあささくささくささくささくささくささくささく
左は身にあささくささくささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささくささくささく

八番

左 拵

控中納言

とくく文字つて記をこくハ海さうんさうや作らん
とくくハ新乃掃く物も物もむし語をさきぬふとやえむ

右

雅行

さう一人物山乃物とくくハ海さうんさうや作らん
左あかひにふち作れととくくハ海さうんさうや作らん
要さう一ちふさうしたとつさハあまりあさうや
作れととくくハ海さうんさうや作らん
やあはくしておととくくハ海さうんさうや作らん

九番

左 拵

左大臣

^{新古} 美ふさうさあき知りさうとくくハ海さうんさうや作らん
たてハ海さうんさうや作らん

右

家隆朝臣

時そとやあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん
左あかひにふち作れととくくハ海さうんさうや作らん
右あかひにふち作れととくくハ海さうんさうや作らん
くハ海さうんさうや作れととくくハ海さうんさうや作らん
福しあ合ハあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん
上ああさあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん
も海へさあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん

十番

左 拵

お大信正

ああふたふかさあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん
お大信正
ああふたふかさあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん

右

定家朝臣

ああふたふかさあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん
ああふたふかさあき乃言さあきむんさうとくくハ海さうんさうや作らん

たふとすれはゆき東をさしとふかりくは
けとちやまはけとふ多しひてあくや五月のち
といふ文字つゝ記ありしはけりやとてまじの
とのく定りけりくけりまよりありし也

十一番 秋意

左

歌定

やさしおぬ宿の庭よまをさつきそ秋の夕の坊

右 新古

歌大信正

新古
形へ此歌いさことあてやこわれつゝ神よりさす萩乃うい風
たよらうやさしといふけりあつきそ秋のゆふ風
あろ初うとふたうくいえしけりそ萩のう風いさくけり
あてやといひ神よりさす萩の上風いさくけり
くけりそ萩御負へさうけりいさくけり

いさしけりいさくけり右のけりさうやけりんとけり
く人ぬよ跡又さうけり也さうけり

十二番

左

控申細うし

あつひつあつさうけりいさくけりいさくけりいさくけり

右 新古

定家御記

ころひも月やあぬ大さの秋いさくけりいさくけり
あそともふ秋のかもひはけりいさくけりいさくけり
た番岳、秋興賦乃あろくもけりいさくけり
ものさといふやをさうけりいさくけりいさくけり
程あろあつさうけりいさくけりいさくけり

十三番

左 歌

俊成口女

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

右

雅經

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

十四番

左

左 大 伴

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

十五番

左

宮内口

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

十六番

左

家隆朝臣

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

十七番

左

家隆朝臣

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

十八番

左

家隆朝臣

あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる
あきつるやゆめ乃宿のあきつるやゆめとく神の夜まはるる

十六番 冬恋

左

芦鴨乃をらふ翹をきく雲のさし之りてもいく世にぬらむ

右

雅徑

雲のさしや布敷の中居中くよかれあて人と何れあてん

左 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

中 居ありくよきといひききあて人とていつくさるふ

右 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

左 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

中 居ありくよきといひききあて人とていつくさるふ

右 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

十七番

左

家内

落つともあきなりおぼいさる衣汗くも神りみしりもれを

右

み家おぼ

あきなりおぼいさる衣汗くも神りみしりもれを

左 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

中 居ありくよきといひききあて人とていつくさるふ

十八番

左

親宅

うけりゆく離乃さくも折くはあれしり乃秋をこあき

右

控中 御宅

あきなりおぼいさる衣汗くも神りみしりもれを

左 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

中 居ありくよきといひききあて人とていつくさるふ

右 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

左 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

中 居ありくよきといひききあて人とていつくさるふ

右 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

左 ありあけ海詞をうくくこあけゆきもきくさあき

意乃んもともくあくや作んともく右のちまふあり作り
—あり

十九番

左 録

お大信正

いつつ又ふきあくなうに河田よびひつひてもゆくころる死

右

赤澤新伝

意を乃く夏のゆきれさあう雪の流さふやう山をきみより
たおもひつひてもゆくころる死
作らに右をりれひ志のうあう雪乃といへうはうりく
作らと未乃う山をきみよりやあう死詞又作れと
あわて度幾をうりころるや作んともくたう作り也

二十番

左 録

後成口女

新古

通ひう宿乃みち芝くれく又睡る記露乃むま海へ建は

右

定家新伝

床乃露まらうのわささひぬむまひもをぬ人のちきり又
右ああろ婆らうりく作んへ一志考も床乃露
物のわあといひて結ひもせぬといもゆう又ハ作
ましと左程らうりく作れを録又ありき

廿一番 曉意

左 録

家隆新伝

つれ来ふいまいのなほくもひ乃累のあうにきぬ乃月

右

雅經

あういし時乃をひつらむれとあへを君あね夜のあり川さ乃そ
たにいすいのころるはくまじりといふ心さうりくあわ
あうのまひつらむれとあへを君あね夜のあり川さ乃そ

たれあふ心をこゆるふ侍をうさく人のこひや
色はも人御くハ侍しといふおそふらさやうふ
やうふし侍ををた乃こあふ御く侍むと思ひ
まひとをぬ乃をさうりおく月あさやいたと
この侍とを侍をやうてけなな七月ハ侍ああり
と侍侍しハうさふさう侍りなれとてかち
よあり侍あり

二十五番

左侍

右大臣

もりあはれあ乃あをいふいとしてあゆむもあはれ神の上か
吹^吹侍と何うス人あある乃あうりもとこいさうさ物と
左あのとあをいふいとてといひきやむもあはれあを

左中納言

いへるあろおしく侍を右末乃ウヤとくあ
を侍えし仍左侍あり侍る也

二十六番 暮忘

左侍

親定

新續古

いふあはれあをさう神のあはれ月とのこまうゆあこれのを
右 定家御侍

玉葉

あはれつまをさうあをのささた。ウサうて君あのみん
たああはれあをさう神のあはれ月とのこ侍ウサ
あはれつまをさうあをのささた。ウサうて君あのみん

二十七番

左

左大臣

いふあはれあをさう神のあはれ月とのこ侍ウサ
右侍 雅定

あちさくそへーのつりこてゆらんこのおふれのを
 ぬ市乃又らぬのそあちさくともおふりく
 こり傳りれ傳といあてといのーちゆらん
 このといさういさういれまうりくそし傳れおの
 傳りあり傳りにこそ

二十八番

左 傳

右 傳

^{新古}何ゆへと思ひも入ぬ夕さふ傳りこりおやうのを月

右

お大傳

いふせん傳へーとふおさうして言ゆく傳りおちおれは
 左まちおーものを山のそ月と傳りこ右傳りこ
 たよおとひふてといひてられゆくこのといさう
 字つて死にれといさうく傳れと左のやまのそ月を

たちのおつて傳れを傳り定めり也

二十九番

左 傳

後 傳

あちさくそへーのつりこてゆらんこのおふれのを

右

お大傳

いふせん傳へーとふおさうして言ゆく傳りおちおれは
 左まちおーものを山のそ月と傳りこ右傳りこ
 たよおとひふてといひてられゆくこのといさう
 字つて死にれといさうく傳れと左のやまのそ月を

三十番

左

右

あちさくそへーのつりこてゆらんこのおふれのを

右

お大傳

おもむきありし海さうあけりかきのそこのさうらあさるせ
左様のそよ風うちそくといひ人とさきしとおもひ
とちりんとつやさうふあしけりおき乃ちさて
らその秋風ハ彼あまの神あまの人さきとてといひ
まうとさへうあまの神のまことといひさうはうはわれ
を猶よあつとさう也

三十一番 罽中意

左

定家新伝

君あまの木のそよとつし一様衣をひもあまはゆこわれり

右様

家隆新伝

茶子やまぬ罽中乃り柳きとひらりのあまの罽のそよ
左歌木のそよはくしそひ衣といひことるさう
くわれし右歌まつとひらり乃秋風の度とれと

三十二番

左

有家新伝

すしーあろことねさやうさやとく様。う作也

むしう船や独也ひよむせふれさつ、あれう一書もこもして
右様 雅經

そあねむいささうん市さしんあしぬあへ乃夏のあまひち
左ハむしう船やとさうはくしそひ衣といひことるさう
ハあやさそ乃あのおよやとあしけりいひらりさひ
むせふれといひさうしそひ衣といひことるさう
いぬあまのそよはくしちとつさうはうはうはうはうは
右と様のさうしうはくし

三十三番

右様

親定

君もさういふやまをくむ旅衣あさつ月とせよはく

右

左大臣

宇津乃山うつかあー紀屋さして若上郡の人ちこほほは
たの袂おつ月とせよよき入てと約らんをさる原
氏物語の事乃えん能あまを思わられくいうく
えんよんて侍り右のまは宇津の山うつかあー紀
屋と侍りけ比う川乃山あまを思わく侍りまや左侍
侍るへー

二十軍

左侍

拾中細

まきもこゝあはれよとあろかきあま山と志めてとれを

右

俊成四女

乃誓りむとひー侍るあゝぬるの事をもり

左禰中乃心きたりくふ侍るへー右い志れ乃誓
むとひー侍るあゝぬるの事をもり
と志れぬる侍るあゝぬるの事をもり
又志れぬる侍るあゝぬるの事をもり

二十五番

左侍

あま侍

昔はさふ神をあゝぬる侍るあゝぬるの事をもり
あま侍

右

あま侍

やうりあらん程とひいれつとふ侍りまほしうつれやす能
左大臣宇津のやすあしあれくは侍れと左大臣
乃色あゝやうよんし侍り右大臣たうりまほし
い(うそり)あゝぬる侍るあゝぬるの事をもり

二十六番 山家意

左 孫

俊成四女

人とぬはこふつこころ山さきのねよあろろあさき帯のこま

右

赤尾おた

こぼろお人ちいつもくれまより誰やう里のみこゆも
たはこあつさ山さきのこころあろろあさき帯のこま
お人ちもまこといつこころあさき帯のこま
いとしいおわせぬくもあさき帯のこま
ありけり

二十七番

左 孫

たおた

^{新古}山うつら麻のこ衣あさきあさきありて月日や杉あけふ

右

定家おた

風あきこもあさき帯のねもこころあさき帯のこま

二十八番

左 孫

頼定

左あいて月日や杉あけふ
孫よりけり

力とてまはひもろそ杉のたてたてりともと杉あけふ

右

おた

おもしの信あさき帯のねもこころあさき帯のこま
たの杉のたてたてりともと杉あけふ
あさき帯のねもこころあさき帯のこま
こころあさき帯のねもこころあさき帯のこま

二十九番

左 孫

お大信西

山陰や山さき帯のねもこころあさき帯のこま

右

雅經

君もろや都もろそふ家のやをぬぬひよあつあひつ
左やうもろ都乃あつあふと家ひとりもろと伝家
まろもろくやもろと家乃うやととろハ及ひ
くまゆ

四十番

左拵

控申細言

ひとりもろまろとととろぬぬをぬぬぬ洞乃くぬそんや
右

文内口

物おもぬ人の塩乃山そふ家乃ひとつのおなぬぬぬ
左まろもろりもろハ山家乃あろあくや右未乃白
あそ乃百その中小家ののそあそろへて拵と

四十一番 古口念

新古

左拵

親定

里いぬぬ屋上乃文のつろつろつろつろつろつろ
右

左拵

續拾

まろもろとちろつろとつろぬぬはむろかろり乃まろつをそろ
右尾乃宮のつろつろつろつろつろつろつろつろつろつろ
乃白乃ろろくつれととつろつろつろつろ

四十二番

左拵

有家新花

あそ人のあそろろろあそをめて庭もまろつれもせく乃新を
右

家際廻花

そあそやあそ乃古ゆくろりをせろつろんの神ぬつろん
左あそ人のぬろりあれぬつろつろつろつろつろつろつろ
神ぬつろつろつろつろつろつろつろつろつろつろつろ

四十三番

左 持

お大傍に

色小見よ神に志られ乃あさきこのこころの秋はおもひい

右

俊成は女

飛多乃あまをれさこの秋をきぬあやう一人にまつれもせと

左はあみささる乃あさきおひさうくはる人

右はあまのこさけあましくあさきやあしはる人秋をぬ

とくさうくあまのこさけあましくあさきやあしはる人秋をぬ

四十四番

左

檀中細之

はるさよの麻をあれさきあさきあはれそいしあさき

右 持

文内は

あさきよの麻をあれさきあさきあはれそいしあさき

四十五番

左 持

定家翁は

つれあさきと持せしるのそのあはれぬあさきあはれぬあさき

右

雅徑

人あさきと持せしるのそのあはれぬあさきあはれぬあさき

左はあさきと持せしるのそのあはれぬあさきあはれぬあさき

右はあさきと持せしるのそのあはれぬあさきあはれぬあさき

あさきと持せしるのそのあはれぬあさきあはれぬあさき

あさきと持せしるのそのあはれぬあさきあはれぬあさき

四十六番 藤油翁

左拵

後成江女

邦ともろろ乃まきもゆきまゐり戸の沖乃らまひまうた
まゆひ

いづいそてあそあうーあまのふあのみまも月そつわ
右あそわうーかひりまうまうやとあしゆと左戸
屋の沖とまきもゆきまゐり

四十七番

左拵

控申納言

あまもや風乃たうりと持て神りほ立極まうに
右
定家御侍

己辰ねの浪乃の月と熱つ、才と半室よとまうみ人
右
乃ら持てまて持ていり右うまもまもまも
ゆきまゐり又持て定うあり

四十八番

左拵

親定

おもの人とらまひ乃まみあ川さむたもふのこら
右
まの御侍

おもひ福の夏乃人よこれと河されまのらまも
右
乃漆河さむれもとのとつらまうく
えゆれ乃乃まもまもまもまもまもまもまも
くゆれを以た乃持

四十九番

左

あま御侍

あまもむしあまの磯乃まの風た夏乃より又かうみん
右
乃御侍

うらねんは流く神のよま月そまもまもまも
右
乃御侍

左たこ夏夜より又西かへんもあつるわうく侍る哉
右浪よるうくといひて月そきまゝあつてさう
くやうく侍るあつて侍りあり

五十二番

左侍

右侍

まてとくを頼めぬ破乃ち控りあき乃浪の初ぬあつてあり

右

雅経

かこふり袖もさきみの浪抱ひとりありのうらや乃身や
左たの上のうらともふさうくくあし侍るを右の末のう
らうや乃身やことのからうくく侍り左虫の乃
浪乃初ぬあつて侍りあつて侍りあり

五十一番 同路意

左侍

右侍

東海やひとり旅子乃目教るそ細きあへぬあつて侍り

右

控申 納言

いそいそんくそあつて侍りあつて侍りあつて侍り
左あつて侍りあつて侍りあつて侍りあつて侍り
控申ハ侍れとあつて侍りあつて侍りあつて侍り
——たり

五十二番

左侍

家隆朝臣

新古

右

雅経

こほくさくうあももそけ侍らんこ夏のあつて侍り
あつて侍りあつて侍りあつて侍りあつて侍り
あつて侍りあつて侍りあつて侍りあつて侍り
あつて侍りあつて侍りあつて侍りあつて侍り
あつて侍りあつて侍りあつて侍りあつて侍り

すうーうさくくやとハスレ侍れと折又付侍より

五十三番

左侍

後奉り女

あふされ本御付多ふあれぞと衣とおもあふさるる

右

宮内口

たしまつう人やいほくさあろくろく名さへうりーあふされ貫

あふされ貫取ひ程の侍者ささる兒やう又侍れ也

あふされ貫とあふされ又あふされ侍れハ左の侍より侍

又十四番

左侍

左大侍

あふされ貫このふと貫と此兼川さるる神のうくに志すれ

右

あふされ貫

誰と又貫もれとやい法えんさるるや神乃あるは月記

左こらひと貫とさるり河ハ取くくも侍れ右乃

あふされ貫神乃あるさるりハ取くく侍れとと白い

あふされ貫とあふされ侍れをたのうちさるる也

五十三番

左侍

左大侍

あふされ貫このふと貫乃貫屋の扱ひさるり神も混ハこく

右

定家朝臣

あふされ貫浦や浪は面取たちさひて貫あさこゆ風をわづき

左右の浪ナ乃貫たハさるり神もあふされ貫

侍右貫あさこゆあさこゆさるりく侍れとと白い

そまの記あさこゆとあさこゆ侍れとと白い又左殿あふさ

又あふされ貫

右

定家新巻

かれのこをいへ乃海士の神ぬれく又いへるをいへるかへく
左大いへるの御方あく侍りとして持て定作しるは

六十番

左

控中納言

後まつむいせとのあふ乃我神とあふいとるんりそとあふ

右御

家後新巻

もいへるひのさうもさうとさういふとさういふとさういふと
左軽ひとるんき古今のあ乃御あへいへるん
侍りぬるやあといへるさういへるさういへるさういへる

侍りぬる

六十一番 河色巻

左御

左大臣

泊瀬河井てあは流のさういへるさういへるさういへる

右

定家新巻

名を川をいへるさういへるさういへるさういへる
左あまの御方あてあは流のさういへるさういへる
又えんよんて侍りあまの御方の御事御事
侍りぬるいへるさういへる

六十二番

左御

親定

あはたもとさて山河乃瀬あまの御方あまの御方あまの御方
右

後成口女

あはれく乃侍りさういへるさういへるさういへるさういへる
左さく山河乃瀬あまの御方あまの御方あまの御方
あはれく乃侍りさういへるさういへるさういへる

まを乃こませ川こまるとくぬくはゆれとたおくら
よゆら〜

六十二番

左端

宮内口

飛多河ちりり〜む〜く〜く〜んれとやぬとゆらん

右

雅經

築乃ら〜ひのらまはぬ〜神あててや人のかもれとん

たそら〜ひのら海川あ〜ん〜ら〜く〜ん〜ゆ

と左あま川らら名あやせよゆらんと〜ゆ

にら〜くゆれとをゆら〜ん〜

六十番

左端

権中納言

あ〜ら〜つ〜い〜ま〜つ〜は後河神さ〜うきぬら〜ん〜ら

右

家後納言

子もた〜河乃ちり〜ゆ〜と〜あ〜て〜か〜あ〜ゆら乃を

た〜い〜ま〜つ〜こ〜河川あ〜い〜あ〜て〜ら〜ゆら

ゆれとあまゆらゆら〜ゆのゆら〜ら〜ら〜くゆ

と河乃ちり〜ま〜ゆ〜ゆ〜あ〜ら〜ら〜ゆら

右端〜ら〜きぬら〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

六十五番

左端

新大信正

ともそれいあ〜名たつ〜の河流よらぬま〜ま〜ま〜ゆら

右

家後納言

多羽河せ〜入家あゆの流とあ〜た〜ゆ〜人のまらと〜ん

右本あ〜ら〜ん〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

田河い〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

あふ〜

六十六番 寄雨忘

左

控中納言

あふれも朝の志つくりぬくよあもひらるれくもさるそなる

右 孫

俊成口女

新古

あふれにけり時ぬは神よ秋もきていひもろとさゆとせしる

たふああれととせけりりあの句もてぬのふせも

ていさあし侍ととた乃吾時ぬは神よ秋もきてなと

いへ文字つとさえん又侍ふりあのちらよる侍り

六十七番

左

みよ家納言

あれりともぬもあうともあふまふふえあぬ床よあたまりつ

右 孫

定家納言

控くまゐり宿いととてあみこたさのこころ乃むふいせれ

たえあぬ床いぬ床もや侍むむ右佐登乃こころの

むしこあぬ親もいひさう〜も侍〜侍の字付

侍りふり

六十八番

左 孫

親定

あもあうそあこの字とあけさとも侍納乃山のあめれ侍り

右

雅行

あうあひもあぬあうやぬとあ時ぬ字よほふ衣れ神

たあうあう乃字とあけさともなとつとある謀

たう〜く〜うんし侍れ右侍たぬあもやぬとあ

あ〜つ〜えんよいみし侍れとあ秋たぬぬ乃ゆあれ

あわれあう〜ことりてんし侍り侍乃字志〜く侍り

六十九番

左 播

お大倭い

もれぬ雨乃曇りそめらんやあふふ意なりたてし烟ありり

右

宮内口

白くもさびしきもあさねの雲うつぬきも志おたり
左やあふやふとよきて意なりあてしきりあをり
とつとよさちつしきもたしきも思ひたりたれ
上陽人あこのあろころりゆめたれを播く長し

七十番

左 播

お大長

あめ人よ秋夜あらし乃秋のぬし月とらそを播くや新ん

右

お大長

こいつとおやハ福ぬる言のぬしやうそをゆく播の言のゆ

左 右乃あかきさかきもあくゆを左月とらそを播く
倍はくや新んといへく強よあけくゆへく一仍播く
付へー

七十一番 寄風意

左 播

お大内口

^新きくやいふうの言を風もおもたけりきゆあひありと

右

お大内口

おまひくもあふよも海さあけりもあらしあへぬ神乃秋風
右神の秋風えんよんてゆをたれんしはあけり
らうりくゆをや仍まこととま

七十二番

左 播

お大内口

ひとりあふあまの山風やむこまきとあてりしきりたしん

右

歌集新巻

いふ人かありり乃物とても形そのまゝよあさこせそく
左室さ乃山風やむこあき鳥をささるるあさこつ
くそ侍られ右この以寂蓮々そあよ力いなるの
秋風そあつとつそ是秀逸なるそいふそして
とれきたい一佐若ん侍るそりるそやいふもた
侍るそい

七十二番

左括

歌集

こくつふといひこつにたもれくこあさこつ乃庭の松風
右
いふ人あきさむやそむそあ庭は松風乃みのよあきあり
右乃ああそ松風乃あきよあきありとつそいふもた

右

歌集

うねりくハ侍れと左あこつこつハあさこつ
さもあつこつ乃あき侍るな松とつひこつ
こつこつや

七十四番

左

左大巻

萩原やうそふあこつ一秋の風そのおもふそあき家身ひつふ
右括

後成心女

ささこつりあきみこつこつ下萩乃あこつ此風をささこつ
左あこつあきあきあき一秋の風といひものおもふそあき
こつあきひつとつとつこつこつあきあきあきこつこつあき
侍るそ右あきあき此風をささこつあきあきあきあき
あきあきあきあきあき一秋の風といひものおもふそあき
左あきあきあきあきあき一秋の風といひものおもふそあき

五つを、面月より終へ

七十五番

左

定家朝臣

^{新古} 志ろくへ乃社のふれ、雲霧落て方う、むきの新風そく

右掛

雅經

いまうてあねあまこの小夜交てまうとあやふ松風の香
右寄方うむきの新う勢そくとしく、まう
さうまにあうさうへ、右寄まうとおやうま風の
あうとしくまうさうあうく、うさうまうて右のう
と定家朝臣あり

親定

左大臣長良院

侍 十四

頁

又

若大僧正意高

侍 九 持三

頁 三

控中細言上経

侍 三 持三

頁 九

俊成口女

侍 五 持四

頁 六

文内口

侍 四 持二

頁 九

大藏口五家

侍 四 持二

頁 六

左色米控少羽定家

侍 四 持五

頁 七

上信女若原家隆

侍 五 持三

頁 六

左色米控少将雅経

侍 四 持五

頁 七



